第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会で発表しました(2017/2/13-15)

テーマ：「これからの減災・克災の姿を求めて」、熊本地震
場所：名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

2017 年2月 13 日(月)～15 日（水）の３日間、愛知県名古屋市の名古屋国際会議場において第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会が開催され、当研究所の江川新一教授、佐々木宏之助教（災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野）が要望演題「熊本地震」で、富田博秋教授（同部門　災害精神医学分野）がポスターセッション「東日本大震災」で各研究成果を発表しました。

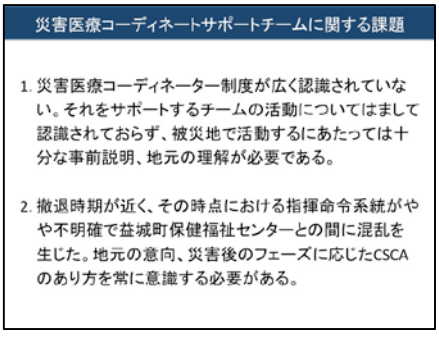
日本集団災害医学会総会・学術集会は災害医学・災害医療を主眼においた国内唯一の学会で、阪神淡路大震災を契機に発足し、災害医療従事者はもとより救急・消防・防災行政関係者が一堂に集結し、国内外で発生する様々な災害についての事例報告、最新研究成果報告を行い、今後の災害医療のあり方を大きく決定づける学会です。

22 回目の開催となる今総会では平成 28 年 4 月に発生した熊本地震に関する演題が多く集まり、演題数 731、参加者数 2300 人はいずれも過去最高となりました。熊本地震関連のセッションでは、東日本大震災の経験を活かし熊本地震でうまく実用化できたこと、またうまくできなかったことなど、各組織・団体からの知見が集まり、集まった知見をどのように「次」に活かすのか、真剣な討論が繰り広げられました。

会期前日に開催された評議員会、また会期中に開催された「災害医学のあり方委員会」には佐々木助教が、「災害医療専任医師の会」には、江川教授、佐々木助教、児玉栄一教授（同部門災害感染症学分野）が参加しました。

「災害医学のあり方委員会」では、熊本地震において初めて学会より派遣された「災害医療コーディネートサポートチーム」のあり方が議題となりました。東日本大震災時には、さまざまな災害現場で活動する各種団体（救急、DMAT、災害派遣精神医療チーム、リハビリチーム、看護師団体、公衆衛生グループ、他多数）を統括する災害医療コーディネーターの不在や役割の不明確さが問題となりました。さらに、コーディネーターを組織的にサポートする「サポートチーム」は存在しませんでした。東日本大震災以降、全都道府県で災害医療コーディネーターが委嘱され、熊本地震では災害医療コーディネートサポートチームが初運用されました。その成果・課題、今後の認定要件、技術指導、費用補償などがあり方委員会の重要議題の一つとなりました。当研究所の災害医学研究部門メンバーも、東日本大震災から５年を経て、学会中枢、国内災害医療の方向付けに関与できるようになりました。

次回、第 23 回は 2018 年2月 1-3 日に横浜市（パシフィコ横浜）で開催される予定です。（第 24 回鳥取市、第 25 回神戸市予定）。



【写真】　左・中央：日本集団災害医学会災害医療コーディネートサポートチーム活動報告
右：第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会であげられた課題

文責：江川新一、富田博秋、児玉栄一、佐々木宏之（災害医学研究部門）